中野区立第二中学校学校だより

若葉 第229号

令和3年6月15日

令和３年度第３号
発行者：校長　松田　芳明

「コロンブスの卵」

コロンブスと聞いて“アメリカ大陸を発見した探検家・航海者”（※正確には西インド諸島だし、先住民族はいました…）であることは、知っていると思います。また、「コロンブスの卵」という言葉も聞いたことがある人が多いのではないでしょうか。改めて、どのような意味合いだったのかドラマ仕立ての文章があったので、取り上げてみました。

コロンブスが新大陸を発見してスペインに帰ると、朝野を挙げて熱狂して迎えた。ところが、あまりに評判が高いので、これに反感を持つ者もいた。

ある日、数人の貴族富豪がコロンブスを招いて盛大な宴会を開いたが、みんな尊大で、傲慢で、コロンブスの評判のいいのがしゃくにさわっていた連中ばかりだったから、酒が回るとだんだん無礼なことをいい始めた。

「君はアメリカを発見した。もちろん結構なことだが、いわば当たり前のことじゃないか。誰でも西へ西へと行けば、アメリカにぶつかるに決まっているのだ。ただ偶然に、君が最初にぶつかったというだけのことじゃないか」といった具合に嫌味をいう。

それがまた、この招待の目的だったのである。

コロンブスは黙って、この無礼を聞いていた。そして、静かに立ち上がって、ゆで卵を一つ持って、こういった。「皆様、どなたでも、この卵を真っ直ぐに立ててくださいますか」一人ひとり試みたが、卵のことだからころころところがってしまって、うまく立たない。

最後にコロンブスが「それでは私が立てて見せましょう」といって、卵の端を少し割って平たくして、そこを下にして卵を立てた。それを見て、人々は笑った。「なんだ、馬鹿馬鹿しい。それなら誰だってできるじゃないか」

すかさずコロンブスは言い返した。「そうです。誰もできる容易なことです。しかし、この容易なことは、たった今、どなたもできなかったのです。他人のしたことを見れば、誰でも容易なことだと思いますが、誰もやらないときに真っ先にそれをやるということが貴いのです。真似ることは全く易しいんですがね」この言葉に、さすがに皆のものはシュンとしてしまった。

「コロンブスの卵」は、“誰もが、出来そうなことも、最初に行うことは難しい”ことを表す言葉として使われています。少し意味合いは異なりますが、最近では「ファーストペンギン」という言葉もよく聞くようになりました。

ペンギンは、多くの個体が隊列を組んで氷上を移動したり、エサの魚を囲い込んで捕食したり、つねに群れで固まり集団行動をとることで知られますが、実はそのペンギンの群れには、特定のリーダーがいません。例えば、群れに何らかの危険が迫った場合は、いち早く察知した１羽の後に続くことで、まわりもいっしょに難を逃れます。強いボスやリーダーではなく、“最初の１羽”に従うのが彼らの集団行動の特徴なのです。

この習性は、ふだん陸上で過ごすペンギンたちが、エサの魚を採るために海へ入るときにも発揮されます。集団性が強いので、群れの中の誰かが海に入るまでは、みんな氷上にとどまって動きませんが、誰か１羽でも先陣を切って飛び込めば、後に続けとばかりに次々と海に入っていきます。そこにはシャチやトド、オットセイなど、恐ろしい天敵が待ち受けているかもしれません。生命の危険を顧みず、真っ先に飛び込んだペンギンは、身をもってその海が安全であると仲間に示す一方、そうすることで誰よりも確実に、お腹いっぱいのエサにありつくチャンスを得るわけです。転じて、その“勇敢なペンギン”のように、リスクを恐れず初めてのことに挑戦するベンチャー精神の持ち主を、米国では敬意を込めて「ファーストペンギン」と呼びます。

＜5/25 火曜日　第 75 回　運動会＞

22 日（土）に実施予定であった運動会は、校庭の回復を見込むことができず、25 日（火）へ延期し、行うことが出来ました。準備から片付けまで、実行委員が大活躍をしてくれました。

私たちが目指す運動会とは、一人一人が協力し、助け合い、声をかけ、声を出し、自分の力を最大限発揮することだと、私たち実行委員は思っています。
今日ここで運動会を行えたのは、「見る、する、支える」を意識仲間がいるからです。なので、今日の運動会は真剣に取り組み、楽しく悔いのない運動会にしましょう。

という、１年生実行委員長の渡部真央さんのあいさつから運動会は始まりました。競技は、「全員学級リレー」「学級対抗リレー」「混合種目リレー」「綱引き」の４種目で、全学年共通です。

「混合種目リレー」は、今年初めて行う種目で、二人で、段ボール箱を複数連ねて運ぶか、ボールを棒で挟んで運びます。箱は、３つだったり、４つだったり、ボールは１つだったり、２つだったりと、難易度も工夫しています。２年生も、実行委員である佐藤栄太くんの

いよいよ運動会が始まります。今年も学年別で行うという形になりましたが、このコロナや梅雨の季節の中、運動会ができるということに一人一人が感謝して行いましょう。
さて、今年の運動会のスローガンは龍章鳳姿です。意味は龍や鳳凰のように勇壮で威厳に満ちた立派な姿です。皆さんも龍や鳳凰のように勇ましく堂々と練習の成果を発揮できるようにしましょう。
また、各クラスで運動会へ向けて目標を立てたと思います。その立てた目標や自分で立てた目標を達成できるようにしましょう。僕はＢ組の目標が「団結、一生懸命、思い出」なので、全員で団結し、一生懸命競技を行い、思い出に残る運動会にできればいいなと思います。

というあいさつから始まり、熱戦が繰り広げられました。２年生は、２回目の学年別運動会ということもあり、種目の特性をわかっていて、選手選びもクラスごとに、工夫を凝らしていた様子です。綱引きは、走りこんで、いかに早く数的優位を作ることが出来るかが勝負の分かれ目です。

Ｉ組の生徒たちは、交流クラスに入って、各種目や係活動に参加しました。ソーラン節等、朝練集、昼練習、放課後練習にも参加し、それぞれのクラスでしっかりと活躍しました。

なんといっても今年度の目玉は、３年生の「ソーラン節」です。かつては、二中でもソーラン節を演舞していた時期があるようですが、ここ最近では、３年生の「大ムカデ」が伝統種目として、重んじられてきました。しかし、コロナ禍により、ソーシャルディスタンスを保つことが出来ない「大ムカデ」は、区立中学校ではから姿を消してしまいました。二中では、改めて伝統の種目を創出しようということで、今年度から「ソーラン節」を開始しました。

「龍章鳳姿」　　３年実行委員長　小宮　袖

「龍章鳳姿」今年度の運動会のスローガンだった四文字に向かって、私はこの１ヵ月間、やりきることができました。

ソーラン節をやるのはどうかと先生から提案があったとき、私はどちらかというと反対でした。ただでさえ短い練習期間で、しかも二中の伝統の幕を開けなければならない。そんなの荷が重すぎるし、何より私は三年生全員が全力でソーラン節をする姿が思い浮かべられませんでした。しかし、皆にソーラン節をすることになったと伝えた翌週、一回目のＡ組の朝練習、アリーナにはクラスのほぼ全員がそろいました。まだ、ぎこちないながらも汗をかきながら動画を必死に確認する姿に、正直想像もしていなかった本番への期待が生まれました。

そしてその後もたくさんの朝練習や昼練習、学年練習をして、ついに本番の日がやってきました。雨天で予定日から延期となり、三日遅れで行われた運動会。そして私たちにとって最後の運動会。そのフィナーレにふさわしい最高の集団演技ができました。ピッタリそろった「構え」。迫力ある「どっこいしょ」の声。指先までピンと伸ばした最後のポーズ。それまでの疲れを感じさせない、素晴らしいものでした。私は、これこそが自分の求めていた「龍章鳳姿」だったと強く感じました。

昨年と同じく学年別で行われた運動会。リレーや綱引きなどの種目だけでなく、整列や掛け声ランニング、円陣や声援などでも、三年生らしい立派な姿を見せることができたと思います。そしてそれは、校舎からや画面越しに見てくれた一・二年生にも伝わったのではないでしょうか。そんな「龍章鳳姿」をこれからも二中の伝統として引き継いでいってほしいと思います。

３年生の勇壮な姿を、１・２年生はしっかりと引き継いでくれるはずです！

＜部活動＞

５月９日から、令和３年度の総合選手権大会が始まりました。３年生にとっては、中学校時代の最後の大会であり、３年間の部活動の集大成です。二中においては、チームスポーツは、１年生から３年生までの混成メンバー、他行との合同チームで出場しなければ人数が足りない部活動もありますが、チーム一丸となって頑張っていました。その様な中、女子バスケットボール部は区内３位という結果を残すことができました。

今月は「ふれあい月間」です。ぜひ、次の文を読んでみてください。

「いじめている君へ」

中１のとき、吹奏楽部で一緒だった友人に、だれも口をきかなくなったときがありました。いばっていた先輩が３年になったとたん、無視されたこともありました。突然のことで、わけはわかりませんでした。

でも、さかなの世界と似ていました。たとえばメジナは海の中で仲良く群れて泳いでいます。せまい水槽に一緒に入れたら、１匹を仲間はずれにして攻撃し始めたのです。けがしてかわいそうで、そのさかなを別の水槽に入れました。すると残ったメジナは別の１匹をいじめ始めました。助け出しても、また次のいじめられっ子が出てきます。いじめっ子を水槽から出しても新たないじめっ子があらわれます。

広い海の中ならこんなことはないのに、小さな世界に閉じこめると、なぜかいじめが始まるのです。同じ場所にすみ、同じエサを食べる、同じ種類同士です。

中学時代のいじめも、小さな部活動でおきました。ぼくは、いじめる子たちに「なんで？」と聞けませんでした。でも仲間はずれにされた子と、よく魚釣りに行きました。学校から離れて、海岸で一緒に糸をたれているだけで、その子はほっとした表情になっていました。話をきいてあげたり、励ましたりできなかったけれど、だれかが隣にいるだけで安心できたのかもしれません。

ぼくは変わりものですが、大自然のなか、さかなに夢中になっていたらいやなことも忘れます。大切な友達ができる時期、小さなカゴの中でだれかをいじめたり、悩んでいたりしても楽しい思い出は残りません。外には楽しいことがたくさんあるのにもったいないですよ。広い空の下、広い海へ出てみましょう。

〔さかなクン〕